

## 40 不安感を描いた絵画

### 心理としての不安感

2020

真鍋友範

人の心理を描いた絵画として有名なのは、19世紀の画家ムンクの描いた作品《叫び》だ。

ご存知の通り、そこには【人の不安感】が描かれている。

そもそも【不安感が絵画のテーマになった最初の事例】は絵画史上どの時代にあったのだろう。

では西洋美術史を振り返って、この心理そのものを描いた絵画を紹介し、その始まりの時期を明らかにしたい。



《叫び》 ムンク 1893  
オスロ国立美術館 オスロ



《テンペスタ・嵐》 ジョルジョーネ 1506-08  
アカデミア美術館 ベネチア

ここで紹介したい作品は、【愛情と不安感をテーマにして描いたジョルジョーネの《テンペスタ・嵐》】だ。

少し解説を加えないと、一体どうして《テンペスタ・嵐》が不安な心理を描いた絵画であるのか、理解が及ばないと思われる。

では解説しよう。

まず、《テンペスタ・嵐》は合成された画面構成なのだ。  
この画面が合成され場面であると判定する根拠は、以下の通りだ。

【ヴィーナスは兵士の約1、2倍大きく描かれている。】

疑う人は、より遠くにいるヴィーナスが立ち上がって、兵士の横に立った姿を想像してみると分かる。明らかにスケール感が異なった人物サイズなのだ。

これはジョルジョーネのデッサン力が、ただ単純に劣るからなのではなく、合成した画面であることを見る人に伝達する意図が内在しているからなのだ。



\* この作品は三つの場面の合成によって構成されている。

\* つまり、兵士の目前にヴィーナス親子がそのまま存在する場面ではない。

さて、合成された画面から再構成されるストーリーを読み取りたい。

兵士は差し迫る嵐の前触れの稲妻の光に目線を送りながら、遠く離れた故郷の街の妻子の安否を気遣っている。

【兵士の顔は黒く、不鮮明に描かれている】が、これは【故人であることのサイン】だ。

一方ヴィーナス姿で描かれた天上界にいる兵士の妻子は、背後の空からの同じ稲妻の音を聴きながら、遠く離れた戦地にいる夫を気遣いその安否を気遣っている。

つまり、これらの【登場人物たちは、全て故人】であり、注文した貴族にとって、この絵画は、【この家族の愛情と不安の心理情景を描いた回想のスナップ写真】なのだ。

登場人物相互に共通するものは、相互の愛情であり、相互の安全を心配する複雑な心情そのものなのだ。

さらに解説すると、《テンペスタ・嵐》は【追悼画】だ。風景画では絶対にならないのだ。

地中海交易で財を成したヴェネチア貴族は、亡くなった親族を偲ぶ、肖像画に変わる新しい形式の絵画＝追悼画をジョルジョーネに依頼し他のだ。

恐らく故人の親族であろう、注文主のヴェネチア貴族にとって、【暗く不鮮明な兵士の顔】も、その方が故人を回顧するのに都合良い表現だったと考えられるのだ。

また、【妻を天上界のヴィーナスの姿にした】のは、【夫たる兵士から妻への愛を最高度に表現した結果】でもあるのだ。<sup>1</sup>

【不安感というテーマ】について、我々現代人に近い近代画家ムンクの《叫び》を最初の表現と思いつかべるのかもしれないが、実はかなり早い16世紀初頭にジョルジョーネが描いた追悼画《テンペスタ・嵐》の中に、より複雑な内面心理を描くという高度なレベルの絵画が描かれていたことになる。

ジョルジョーネのこの心理表現は、500年前の16世紀初頭だ。

時代は盛期ルネサンス期であり、主流の絵画テーマは、主に宗教か古代の物語画だ。肖像画は既に存在していた。



しかし、【個人的なテーマや心理を描くテーマなど描くはずがないと現代人は考えがちだ】。

しかし【ジョルジョーネという天才画家は、絵画の描画テーマ領域に革命を起こしている】のだ。

絵画表現の時代バリアーを突き破って、【心理の世界を描くという絵画の表現領域を広げたジョルジョーネ】という画家は、当時の大御所画家レオナルド・

---

<sup>1</sup> 参照：《テンペスタは何を描いた絵画なのか》 2018 真鍋友範 ウェブ上の論文

ダ・ヴィンチを超えた、時代を先取りした天才画家だとも言えるのだ。

ただ残念なのは、この【画期的な心理描写のジョルジョーネ絵画】が一般に理解されず、長期にわたって誤った判定や内容不明のままにおかれたことだろう。